



# 久留米にノコツタ横綱の横綱 有馬の殿様も鼻高々!?

## 小野川才助の化粧回し

今

から150年ほど前に活躍した力士・3代目小野川才助の化粧回しです。小野川の親族のもとで保管されていた昭和28年(1953)、歴史的な大洪水に見舞われるも流されず、横綱・編み長手袋と共に残った強者です。ほつれやシミは、その勲章といえるかもしれません。そんな武勇伝を持つ化粧回しを、かつて締めていた小野川という力士。いったいどんな人物だったのでしょうか。



3代目・小野川才助の化粧回し・横綱・網み長手袋  
(久留米市教育委員会蔵)



### 1 2代目・小野川才助

有馬の殿様と小野川才助との関係は、その2代目から始まります。

2代目小野川才助は、本名は川村喜三郎といえます。宝暦8年(1758)、近江国大津(現・滋賀県大津市)で生まれました。初代・小野川才助の養子となり、のちに2代目・小野川才助を襲名することとなります。

初土俵は、安永5年(1776)、大坂相撲でした。同8年、活動の拠点を江戸に移します。この時、久留米藩8代藩主・有馬頼貴のお抱えとなり、久留米藩の江戸上屋敷(現・東京都港区赤羽)に小野川部屋を開くことを許されました。記録には、「米百俵五人扶持」で召抱えられていたともあります。

寛政元年(1789)には、当時最強と謳われた谷風梶之助とともに横綱免許を授与されました。これ以

前、3人の横綱が存在したといわれますがはつきりとはせず、記録に残る最初の横綱が谷風と2代目小野川です。寛政2年の番付表に

- 東方 大関 久留米 小野川才助
- 西方 大関 仙台 谷風梶之助



横綱としてその名をとどろかせたのち、寛政9年に引退しました。享和元年(1801)に師であり養父でもある初代・小野川才助が死去。その5年後、文化3年(1806)、帰郷することなく、江戸でその生涯を終えました。享年49。



寛政二年相撲番付 (久留米市教育委員会蔵)



## 2 3代・小野川才助

あの化粧回しの持主です。3代目・小野川才助は、本名は森光幾蔵（のち川村姓）といいますが。天保9年（1838）、山本郡高島村（現善導寺町木塚）で生まれました。

はじめは都灘弥吉の門弟となり、大岬大五郎と称しました。弘化2年（1845）、15歳の時に京都相撲で初土俵を踏みます。生まれつき体格に恵まれ、19歳の頃には、身長6尺3寸（約1・91メートル）に達していたといわれています。嘉永6年（1853）には、二段

目で江戸相撲にデビューしました。安政5（1858）年11月場所、東前頭五枚目で新入幕、当初は阿波徳島藩主・蜂須賀家お抱えで、虹ヶ獄（すまへもん）と名乗っていました。やがて11代藩主頼成のお抱えとなり、万延2年（1861）2月場所から

3代目・小野川才助を襲名しました。同年6月には、五穀神社（現・通外町）での相撲芝居のため、江戸から帰郷しています。

小野川の活躍はまだまだ続きます。文久2年（1862）11月回向院大角力番付に、東方大関・雲龍久吉とともに西方関脇・小野川才助の名前がみえます。回向院は、現在の東京都墨田区両国2丁目にあり、境内では定期的に相撲興行が行われています。ちなみに、この回向院興行を起源として、明治42年（1909）、この地に両国国技館が建設されることとなります。

小野川の江戸での最高位は、関脇でした。慶應3年（1867）、江戸を去って京都へ戻り、明治3年（1870）、京都五条家より京都相撲初の横綱免許を受け、横綱土俵入りを行いました。それからほどなく、同6年（18

## 3 化粧回し武勇伝

1・91mの3代目・小野川が着けた化粧回し。欠損部を含めた本来の大きさは、前垂れ部分が長さ約1m、幅約68cmと推定されます。表生地は紫色の絹織物、裏地は錦。表上段に白い錦の「輪繫ぎに二重線」紋を縫いつけ、下段には太い綱状の意匠が金糸の刺繍で表現されるなど、強者の力士に相応しい造りです。その土俵入りの姿は錦絵に伝わり、

在りし日の頑健・屈強な小野川が偲ばれます。

化粧回しは、3代目・小野川の親戚である志波家に伝来していた遺品の一部です。遺品の多くは、昭和28年西日本水害で流され、かろうじて残ったのが化粧回し・横綱・編み長手袋でした。

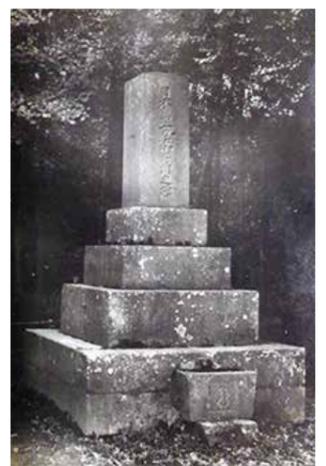
水害を潜り抜けた小野川の遺品は、ほどなく善導寺小学校へ寄贈され、平成28年に文化財保護課へ移管されました。



久留米小野川才助図（久留米市教育委員会蔵）



73）、3代目・小野川才助は若くしてこの世を去りました。享年35。



毛利秀包墓所（山口県下関市豊北町：西楽寺）



明治26年（1893）、弟子たちによって、善導寺村津遊川に「日本第一力士小野川之碑」が建立され、後に善導寺境内に移設されました。妻は追手風喜三郎の娘で、幾太郎と喜三郎という2人の子に恵まれていました。

## 4 江戸大相撲ブームと2人の小野川

江戸大相撲では、18世紀後半以降、大勢の九州出身力士が活躍していました。なかでも久留米藩お抱えで大関の2代目・小野川才助は、谷風や雷電と名勝負を繰り広げ、江戸相撲の最初の黄金期を築き上げました。

また幕末頃の番付では、筑後国山門郡（現・柳川市）出身の名大関雲龍や、肥後国宇土郡（現・熊本県宇土市）出身の不知火と並び、3代目・小野川才助が大変な人気を博しました。

奇しくも、久留米藩主お抱えとなった2人の小野川。ともに江戸相撲で活躍し、スポンサーである有馬の殿様も、鼻高々だったことでしょう。

そして言うまでもなく、長い相撲の歴史を語る上で、欠かすことのできない力士2人です。